



「水のある風景」—「金色の湖」秋田県 十和田湖 写真・文：泉谷玄作

十和田湖は、青森から秋田にまたがる山地帯にある。乙女の像は青森側にあるが、静かな湖畔を散策できるのは秋田側である。湖畔をずっと散歩ができる秋田側には、樹木の枝が湖面まで垂れてその雰囲気が一番好きである。考えてみると秋田県は贅沢な県である。食材も美味しいし、豊かな自然、温泉があり心と体を力づける。11月の初めには、山から湖畔に色づきがうつり濃くなる。

## のじぎく兵庫大会

会長 菅原 三朗

第6回全国障害者スポーツ大会「のじぎく兵庫大会」は10月14日から16日迄、兵庫県神戸市の神戸総合運動公園陸上競技場を中心に開催された。

今回は本県が後年度開催県のため出場参加枠が1.5倍に増え、オープン競技を含め11種目160名の大選手団となった。出発前の結団式で私は団長として、いよいよ来年の第7回全国大会は本県において開催されます。今回はその前哨戦であり、5泊6日の長丁場になりますが健康管理には充分留意され、これまで磨いてきた技と力を十分に発揮され来年の秋田大会につながるものにしていただきたい。又、後年度開催県の一員として私を含め全員が「秋田わか杉大会」のPR兼親善大使の役割を担っていただきたい、そして今回の「のじぎく兵庫大会」を通じて得られた友情

の輪が来年の「秋田わか杉大会」へのかけ橋として大きく広がっていくことを期待したい。と激励をした。

開催前日の13日午後5時半からはポートピアホテル「偕楽の間」において、皇太子殿下ご臨席のもと兵庫県主催による「歓迎の集い」が開催された。参加枠1県4名であり本県からは私をはじめ、アーチェリー競技の川辺守(車椅子)陸上競技の三浦美和子(聾学校)介助員小林日笑美(手話通訳)が出席した。主催者歓迎のあいさつそして乾杯のあと、皇太子殿下は前年度開催県、本年度開催県、そして後年度開催県の各テーブルを廻られて、夫々にお言葉を賜りました。私は殿下に選手2名と介助員を紹介申し上げ、来年度第7回の全国大会は秋田県で開催されます。名称は「秋田わか杉大会」であり、又スローガンは「きっと出会える夢と感動」であります。秋田県は全国一の杉の産地であり、真つすぐ健やかに伸びる「わか杉」のたくましい姿に因んだ名称となっております。また115万県民一人ひとりに「まごころ」で大会を支えていた

くことになっております。来年は秋田でお待ちいたしておりますと申し上げ、殿下も大きくうなずかれていた。2人の選手にも夫々質問や励ましのお言葉があった。

開会式も晴天に恵まれ華やかに開催された。本県は団長以下70名で入場行進を行った。今回は入場行進完了後、各選手団に感謝と歓迎の思いを込めた「のじぎくの花束」が各選手団の団長に手渡された。やがて炬火が点火され、選手代表の宣誓が行われた。その後歓迎の演技では、突然の災害からよみがえる兵庫を表現した演技など盛り沢山の出し物があった。開会式終了後一斉に各種競技が開始され、3日間に亘る熱戦が繰り広げられた。

16日の閉会式において、大会旗が井戸兵庫県知事から秋田県寺田知事に引き継がれた。県勢は選手121名が11競技に出場、メダル数は過去最多の28個(金11銀7銅10)で後年度開催県枠で団体5競技に初出場して全国レベルを実感するなど来年の「わか杉大会」につながるものとして弾みをつけた。

# ダンピング対策強化を求める

## 東北建設業協会ブロック会議

東北建設業協会連合会（奥田和男会長）は10月11日、青森市のホテル青森において、東北建設業協会ブロック会議を開催。東北6県協会、国土交通省など関係者約160名が出席し、今般の諸問題について意見を交わした。

会議冒頭の挨拶において奥田和男東北建設業協会連合会長は、昨今の建設業界において需要と供給のバランスに乱れから低入札が横行。品質、安全、環境、雇用、労働条件等の破壊が起きていることを指摘し、発注機関に対して、ダンピング受注防止、品質確保の徹底を強く求めた。来賓として出席した大森雅夫国土交通省大臣官房審議官からは、「4月から対策を講じているものの、十分な効果が上がっていない」とした上で、更なる対策を議論していると述べ、ダ

ンピング対策が喫緊の課題となっている認識を示した。

会議には、三村申吾青森県知事、国土交通省から大森大臣官房審議官ら幹部、前田靖治全建会長が出席。挨拶の後、議事に入った。

議事では、▽「強く美しい東北」を実現するための公共事業予算の重点配分▽道路特定財源の確保▽ダンピング防止対策強化▽品確法にもとづく総合評価方式の運用など、13項目について協議を行った。

この中、本会の北林一成副会長は「建設現場で働く者の生活の質的向上」について発言。秋田県における普通作業員の労務単価がピーク時から約35%もダウンしている事を例示し、年齢や経験、資質・能力、また、生活の可否を鑑みた賃金体系の構築など、設計労務単価の決定について抜本的な見直しを求めた。

会議の最後、▽平成19年度公共事業予算の確保と東北地方への重点配分▽平成18年度下期補正予算編成▽国民の安心・安全を確保する対策費



の予算措置▽道路特定財源の確保▽品確法の運用徹底▽受注量の確保・拡大の6項目に渡る決議案が満場一致で承認された。

なお、東北建設業協会連合会では、決議にもとづき、10月16日に財務省、国土交通省への要望活動を実施した。

## 県議会建設振興議員連盟

# 視察調査協議会を開催

## 地域の抱える問題を調査

県議会建設振興議員連盟（北林康司会長）は、10月2日、秋田キャッスルホテルにおいて、県央2地区（秋田、由利）、10月13日、北秋田市ホテル松鶴において、県北3地区（鹿角、北秋田、山本）を対象とした視察調査を行なった。

調査は県内建設業の実情を把握するとともに、健全発展に寄与することを目的に開催したもので、昨年度は県南3地区（仙北、平鹿、雄勝）で実施している。

会議には、北林会長をはじめ、当該地区選出の県議会議員と、建設業協会の役員が出席。各地区協会から提出された、地域の抱える諸問題や、秋田県入札契約制度について懇談を行なった。

最後に北林会長が「提出いただいた要望、意見につきましては、県議会の建設委員会で再度検討するとともに、議員連盟としても県当局と話し合いをしていきたい。」と締めくくった。



## 県協会

# 建設業女性経営者研修会

## 社会資本整備の現状把握と経営環境の改善を考える

県協会は、平成18年10月4日（火）秋田ビューホテルにおいて、建設業女性経営者研修会を開催した。同研修会は依然として建設業を取り巻く厳しい情勢の中、秋田県における社会資本整備計画等の現状の把握と、女性経営者としての共通の課題等についての情報交換により経営環境の改善と会員間の交流を増進することを目的に開催された。研修会には、県内の建設業女性経営者ら10名が参加。

研修会に先立ち、嶋貫隆夫秋田県建設業協会専務理事が「われわれ建設業界は長いトンネルの中にいる状況であり、出来るだけ早く明るい所へ出るよう関係機関等へ要望してまいりたい。これからの公共事業は大幅な増加はありえない。本県の『あきた21計画』では、新規事業が減少し、公共施設についてはメンテナンスの時代に入っていく。業界として



は時代の流れを見据えて対応しなければならぬ。」と挨拶した。

続いて、山岡史直秋田県建設交通部建設管理課長が「秋田県の社会資本整備関連施策の概要」と題して講演を行い、秋田県における建設業の現状と課題、建設工事に関する入札契約制度の見直しの概要について建設業協会支部との意見交換会における意見、要望に沿って説明された。

また、意見交換会では、「新分野へ進出するために投資すると経費の点下がる。新分野進出の阻害要件になっている。」「ISOを取得したが、最近では取得してもそのわりに評価されていない。」「実態にあった労務費単価の見直しをして欲しい。」「新分野進出事業について。」などについて女性経営者の立場からの意見、要望が出された。

支部だより（平鹿）

## チャリティゴルフコンペを開催

チャリティ寄金をNPO法人「太陽の園」へ寄贈

（社）平鹿建設業協会主催の第2回チャリティゴルフコンペを9月22日、羽後カントリー倶楽部にて開催した。

昨今、公共工事量の激減により協会も厳しい状況下におかれているが、これからは地域に必要とされる企業が生き残れる時代と考え、会員が地元地域の皆様と親しく楽しい時代を過ごし、協会に対する理解を得られる場にしようと地域への幅広い声かけを重点に展開を図った。

地域関連企業等多くの賛同が得られ、80名の参加と善意のチャリティ寄金103,800円が寄せられ、9月29日当協会伊藤俊悦会長と実行委員長の高橋俊一理事がNPO法人「太陽の園」を訪れ寄金を山本理事長に手渡した。



新規学卒者研修

建築委員会

土木委員会

労務委員会

経営委員会

産業安全衛生大会

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

## 情報コラム Vol.7

### 入札ボンド制度の導入について

国土交通省では、一般競争方式の拡大と総合評価方式の拡充に伴う条件整備の一環として、入札ボンド制度の導入を図ることとしております。

入札ボンド制度とは、公共工事の発注に当り、入札参加者に対して、金融機関等による審査・与信を経て発行される契約保証の予約的機能を有する証書の提出を求める制度で、当該機能を有する証書を「入札ボンド」と呼び、競争参加資格を有する全ての入札参加者について入札保証金を免除してきた一律的な運用を改め、入札保証金の納付を原則化した上で、入札ボンドの提出があれば、入札保証金の納付を求めない運用に変更することとされました。

東北地方整備局及び近畿地方整備局において実施される一般競争入札（7.2億円以上のWTO対象の一般土木工事等）の一部から段階的に導入し、効果を見極めつつ、順次拡大される予定です。

# 土木建築の

# 近代化遺産

No.52

## 玉川橋

大仙市花館・神宮寺字間倉



玉川の下流部、雄物川との合流点付近にかかるとの玉川橋は国道13号の道路橋である。この橋の沿革は明治初期にさかのぼる。明治十四年（一八八一年）の明治天皇東北御巡幸に合わせてその前年に完成したのは仮橋であった。それが四年後の大洪水で流失したため明治二十二年（一八八九）に全長三百六十間（約四二五m）の長い木橋が架けられることになった。その長い橋は当時、全国一長い木橋として話題になったという。元来、玉川は大渡し船場と小渡し船場の二つがあつて玉川と大戸川の2河川を渡らなければならなかつた。橋はその二つの川を一気にまたぐ形になった。

昭和四十七年（一九七二）にすぐ上流に現在の道路橋の元となつて鉄骨製の新しい玉川橋が完成した。それは旧国道13号バイパス開通と同時に建設されたものである。しかし、交通量の増加のためますます高まりを見せ、渋滞緩和のためにさらなる改良の必要性に迫られている。現在、国道13号大曲バイパスの4車線化に伴って、新しい2車線の橋を並べるように建設、新しい道路橋が完成の見込みである。玉川と雄物川の合流点付近は、姫神山や神宮寺岳、伊豆山など、いわゆる大曲の西山連山として地域のシンボリック景観となつてゐる。こうした自然環境と災害防止、交通の利便性、相反する要素をどのように折り合いをつけていくのか注目されるところである。

（取材・構成／藤原優太郎）

# 美術の秋

酢屋 潔

今では週一回本屋まわりをするのが楽しみとなっている。しかし、どうも今のベストセラーとか、芥川、直木賞などを得た作品は読む気がしない。何うしても明治、大正、昭和の作品について目がいつてしまう。特に文庫本は値段も安いし気軽に読めるので新刊の出るのが楽しみだ。

そんな時ふと本屋の片隅においてある塗り絵の本を見つけた。タイトルに「大人の塗り絵」とあったので興味を覚えた。早速二冊購入、家に持ち帰り塗る準備にかかった。水彩の絵具はごみをかぶって埋もれていたのを取り出し、筆やその他のこまごましたものもついでに探し出していよいよ何十年ぶりかで筆を取るようになった。チューブの中の絵の具は長年使わなかったので硬くなったのもあり描くまでがたがたしたが何うやら筆を下すことが出来た。

先ず題材は花からはじまった。花は色がきれいな上輪郭が画然としているので初心者には手頃である。はじめ紫の朝顔からはじめたが葉の緑とのコントラストが良い。白い紙に次第に色彩豊かな植物の姿が現れてくるプロセスは心地良かった。一応仕上がったので見本と並べて観察してみる。似て非なるものというか、どこか違う。一番気になるのは色彩であった。最初咲いた花と後から咲いたのでは同じ色でも少し違うという。この違いを出すのはなかなかむずかしい。しかしこまごまにこだわらず花の絵は十枚ほど描きあげた。免に角輪郭が出来ているのでデッサンに気を使うことがない。ひたすら色を塗ればきれいな花が白い紙に現れてくるのである。花の中で変り種は紫陽花、ほおずき、向日葵で夫々特色があった。ほおずきは同じダイダイ色でも三段階に分けねばならず、向日葵は中央の種が根気のいる仕事になった。紫葉花は粒の変化が見せどころだろう。

花が一応終わると印象派の絵に取りかかった。花を描いた流れでルノアールの「アネモネ」を描くことにした。

この絵は花瓶に生けてあるアネモネの花を描いたもので花弁は赤を基調にしているものの印象派独特の複雑な色彩となっている。白を可成り用えているので水彩で描くのはむずかしい。背景は紫を基調にした複雑な色彩の混合であるが、これは水彩にとってむずかしいものでない。一つが完成すると次が描きたくなくなる。そこでセザンヌの静物画「砂糖壺と果物」に取りかかる。描き易い題材なので仕上げもうまくいった。この絵の真髄はさて置き、見本と並べ大変似ているのでひとり悦に入る。

こうして毎日一枚づつ描きあげ一冊が終わった。ここで一寸休み今迄自分の描いた絵と見本をじっくりと見較べる。自分が上出来と思っていた絵もじっくりみれば欠点ばかり目につく。しかし名画の面影が少しでも残っておればそれはそれで楽しい。

セザンヌの静物のあと印象派の名画を次々と描いた。その中でむずかしかったのはルノアールの「レースの帽子」だったが白を丹念に残したらいくらか似たものが出来た。ゴーガンのタヒチの絵は現地人の家の屋根の色が全体を支配した。ダイダイ系統で強烈な色彩を出そうと頑張ったがどうしても出来なかった。

さて作品を並べて見ているうちに折角描くからにはもう少し大判で額にいれて飾るようなのを描き度いと思うようになった。そこで先ず近くのサティに探しに出かけた。三階の書籍売場には小さいサイズばかりだったが文具売場の一郭に少し大判の塗り絵があった。そしてストレスの大、小に分れて展示されていた。よく見るとそれは発行元が絵の具の会社でくれよん用だった。水彩用の大判もあったがなぜか浮世絵のものばかりで下絵も線がなく淡墨の面となっている。塗り絵もここまでくればそのうちもっと大きく、

バラエティーの豊んだものも出るだろうとその場をあとにし、ついでに同じフロアの絵を展示している小さな店に寄った。丁度好みの安野光雅の新しい絵が展示されている。水彩で新しい形式の版画のようだったがそれはイスタンブールを海から見たもので聖ソフィア教会を前面に据えて後に街を控え尖塔があちこちに立っている。という真に好ましいものだった。

この人の絵が好きで今迄画集などを買って、それを見本に何枚も模写をしたものだ。彼の絵は対象を独得の目で観察し自分の中で画構築する手法で雑念を払ったように爽快であり見るものを幸せにしてくれる。この絵は前景と後景がグレイの濃淡でくっきりと分けられ、前景には赤のトルコの国旗があちこちにちりばめられアクセントになっている。朝か夕方の一時のたたずまいと思われるが空と海のピンクの色によりイスラム寺院を中心としたイスタンブールの街がシルエットのように浮かんでくる。

この絵の前でしばし足を止めたあと角を曲がったら石井崇という画家の展覧会が開催されていた。最初の作品の色彩が強烈だったので説明の文章を読んでみたら南スペインを放浪中に描いた作品とあったので興味を覚えた。

彼は1942年東京生まれ、東京芸大を出て紆余曲折、昭和50年(1975)単身スペインに渡りセビリア近郊に居をかまえてキヤ稼業をし乍ら絵を描いた。この展覧会にはその時の絵も何点か入っているとのこと。

彼が書いたものによると「人が人らしく生きるとは、人と自然とのあるべき姿と考え乍ら絵を描いた。その答の鍵がスペインの村にかくされているようだ」と。人が絵を描く理由は人夫々であろう。能書きはさておき作品を見てみよう。

先ずはじめに目に付くのは居をかまえた村「アルプローラ」である。先ず山がピンクにぬられているのに驚く。山の凹面は青かったグレイ、民家の屋根はグレイの濃い色、壁は白、地面は朱に近いダイダイで山と平地の赤傾向の色が画面を圧倒している。

中に入るとトレドの「満月」の絵が人目をひく。はじめセルシアンブルーがイエローオーカーのトレドの街を包み込んでいたのを見た時お伽話の一場面のような気がしてならなかった。題名が「満月」としてあるので、満月の夜のトレドの情景だったかと合点がいった。トレドには五回ほど行っているが夜のトレドは見たことがなかった。昼間見たトレドは古色蒼然として眠っているように見える。この絵を見て月夜に浮かびあがる蜃気楼のようなトレドの街を想像し、もう一度行ってみたい思いが込み上げてくるのであった。

「八月」と名付けられた絵もスペインはアンダルシヤ地方を象徴しているように思われた。八月のアンダルシヤ地方は正に灼熱の大地である。その大地を石井は燃えるような朱の色で覆っている。空は黄土色に紫、そして広々とした地平線が朱色のかなたへ消えてゆく。

この時私はセビリアのヒラルダの塔に登った時のことを思い出した。セビリアの空はあくまでも青くはるか見はるかす彼方に地平線がかすんで見えた。その時浮かんだ未知なる彼方への旅情、遠い昔の物語りとなってしまった。

さて見終わって安野と石井の作品を較べれば対象を再構築することは似ているものの表現は対称的だ。安野は見る人の心をやわらかくつつむような筆使いなのに反し石井は情熱のおもむくところ奔放に筆を走らせている。

しかし、この二人に共通していることはその大衆性にあるだろう。安野はすでに有名でマスコミなどにもしばしば登場しているが石井はそれ程知られていない。それでも二人共大会場に展示するよりは小市民の集う小じんまりした会場が似合うように思われる。

今日はたまたま好きな絵に遭って幸運だった。そんな思いで会場をあとにし図書売場を通ったら「美術の秋」の垂れ幕が下っていた。